

# 大学院FDをどうするか

人文科学研究科長

丹治 信春

2007年度から、大学院設置基準の改正により、大学院におけるFDが義務化された。このことを、おそらくかなり多くの大学関係者が、(私と同様) 当惑をもって受け止めたのではないかと思う。というのも、われわれが通常“FD” という名前で理解しているものを、大学院にそのまま適用することは、非常に難しい、あるいはあまり適切ではない、と思われるからである。

もともと、FDの必要性が一番理解しやすく、FDがいわば一番しっかりと馴染むのは、教養科目であろう。教養科目は一般に学生数が多く、どのあたりの学生に照準を合わせて授業をすればよいかの判断が難しいし、また、学生の所属もまちまちで、必ずしもその科目に興味を持っている学生ばかりではないため、学生の興味を引き出し、それを持続させるにはどうしたらよいか、といった「教育技術」を習得することの必要性には、大方の理解が得られるであろう。

しかし大学院はその対極にあり、教養科目の授業とは非常に事情が異なっている。一般に大学院の授業は少人数であり、教員はすべての学生をよく知っている。学生たちは、大学院に進学するくらいだから、当然のこととして授業科目には強い関心をもっている。そこには、上に挙げたような「教育技術」の必要性はあまりない。では、そういうところでFDとは、いったい何をする事なのか? 少なくとも、大学院におけるFDが、教養科目などにおける従来の「典型的」なFDとは、相当違うものとなることは、これだけからも明らかだと思う。

そしてまた、FDのための基礎資料として最もよく利用される「学生による授業評価」(SE)も、大学院においては、かなりその考え方を変えなければならないであろう。なぜなら、例えば本学で「都市教養科目群」に関して行なわれているSEでは、学生が自由に評価することができるように、評価者の匿名性を重視しており、学生数の少ない(10人以下の)授業科目については、結果を授業担当者に通知しないことにしているが、もしも大学院でSEを行なうならば、匿名性を守ることは非常に難しいからである。そして、匿名性を守らないSEは、それを守るSEとはかなり種類の違うことと考えなければならない。それは、教員が直接学生から意見や要望を聞くことに近く、そういうことであれば、ほとんどすべての教員が、既に日常的にやっていることであろう。

もう一つ、とりわけ人文系の分野において、大学院

(さらには学部専門科目)と教養科目とで事情が非常に違うのは、シラバスのもつ意味である。(ただしここでは、シラバスの内容のうち、成績評価の仕方や参考文献の指示などは除き、もっぱら授業内容の記述の部分だけを考えている。)教養科目では多くの場合、どのような内容の授業とするかは予め決まっており、その予定をある程度詳しくシラバスに書き、前以て学生に知らせておくことは、学生が履修する科目を選択したり授業に向けて準備をしたりするために、役に立つことであろう。(ただし、理論的な概念を多く用いるような科目については、必ずしもそうではない、ということには注意しておいた方がよい。なぜなら、そうした理論的な概念を使って書かれたシラバスを理解するためには、その理論を学ばなければならない、本当にシラバスを理解できるのは、授業を最後まで聞いたあと、ということもありうるからである——これを私は、「シラバスのパラドックス」と呼んでいる。今年度、私は教養科目の「論理学」を担当したが、「命題論理」、「述語論理」、「タブロー」、「妥当性」、「健全性」、「完全性」といった用語で書かれたシラバスを理解するためには、学生は論理学を勉強しなければならないのである。)しかし、例えば人文系の大学院(や学部専門課程)でよく行なわれる「原書講読」の授業などでは、大体どのような問題を扱うテキストを使うかは決めていても、どのテキストを使うかは、その授業に参加する学生の顔ぶれを見てから、あるいは学生の希望を聞いて決める、ということさえある。

また、「シラバス通りの授業」が求められる一方で、授業は教師から学生への一方通行ではなく、学生が質問や討論などによって主体的に参加する形で行なわれるべきだ、ということもしばしば言われる。だが、この二つの要求が果たして常に両立するのかどうかは、かなり疑わしい。学部高学年や大学院での授業で、学生から非常に興味深い質問や提案が出された場合、それを正当に扱うために授業の進行が予定と違ってくることは、十分にありうることである。

もともとシラバスは「レディメイド」の授業に適したものであって、専門課程や大学院における少人数の演習といった「オーダーメイド」の授業には、あまりふさわしくないのではなからうか。

この点は、単に教養課程かそれとも専門課程や大学院かという、学年の高低だけの問題ではなく、学問分野の

違いにも関係していると思う。もう半世紀近くも前になるが、科学革命論やパラダイム論で有名な科学史家のトマス・クーンは、『科学革命の構造』の中で、ある一定の「パラダイム」（あるいは学問領域母型）のもとで研究が行なわれる「成熟した科学 (mature science)」と、そうでない学問との間の違いを、様々な仕方で特徴づけている。成熟した科学においては、研究成果はもっぱら短い論文の形で提示されるが、そうでない学問では、著書の形で提示されることが多い（その著書は、ときには非常に大部となる）。成熟した科学には「標準的なカリキュラム」や「標準的な教科書」があるが、そうでない学問には、そういったものはない、等々。

物理学を典型とするような自然科学の多くの分野が、ここで言う「成熟した科学」であると考えられる。それに対して、哲学を典型とするような人文系の多くの分野は、ここで「そうではない学問」と呼んだものと言えよう。そして上に述べたように、クーンによれば、前者には「標準的なカリキュラム」があり、後者にはそれがない。おそらく「成熟した科学」においては、きっちりと組み立てられた「標準的なカリキュラム」に沿った教育を行なうことが、極めて重要であろう。とりわけ物理学のように、著しく発展したために「一通り物理学を学んだ」と言えるためにも非常に多くを学ばなければならないような分野においては、「標準的なカリキュラム」が大学院にまで及ぶこともありえよう。その場合、大学院においても「レディメイド」の授業が必要となり、そのような授業については、詳しいシラバスが予め学生に与えられて、授業が「シラバス通り」に進行することの重要性が、理解できるのである。

それにひきかえ、「オーダーメイド」の授業（「成熟した科学」ではないような学問分野での、大学院の多くの授業がそうであろうし、また、「成熟した科学」である分野でも、「標準的なカリキュラム」を越えた授業では、それがあろう）では、「シラバス至上主義」があまり適切ではないことは、先に述べた通りである。

こうして、シラバスの改善ということも含めたFDは、「オーダーメイド」の授業の多い人文系の大学院では、やはり、通常理解されている通りに適用すればよいというものではないように思われる。それでは、どうすればよいのか？

たしかに大学院においても、教育方法の工夫・改善の余地はもちろんあるし、そうした工夫・改善によって対処しなければならない問題もありうる。例えば、大学の国際化の進展に伴って、大学院生の国際的な研究発表能力の向上が求められてくるであろう。また、全国的に見れば大学院学生数の急激な増大によって、また本学人文科学研究科においては、入学志願者の急激な減少によって、大学院における「学力低下」が懸念される。結局のところ、大学院におけるFDとは、こうした個々の課題

に対する対応策を検討し、試行錯誤し、そうして得られた情報を共有する、といった、地道な日常的営為のことなのではなかろうか。人文科学研究科としてはさしあたり、そのような営みを研究科としてある程度「組織的」にやってゆくことを考えている。今年度は、人文科学研究科FD講演会として、基礎教育センターの申本助教に「大学院FDの背景」という講演をしていただいた上で、16ある各「教室」（研究科を構成する最小単位で、入試の募集単位）において、大学院教育、大学院生指導がどのように行なわれているのかに関する、情報交換を行なうにとどまった。今後、興味深い提案が出されてくるような雰囲気を作ってゆくことが、重要だと思っている。

最後に、かなり個人的な「実践例」を一つ報告したい。哲学教室では、かなり専門分野が近い、私を含む三人の教員が共同で、大学院の指導学生が研究発表を行なう授業を開いている。その授業では、私の提案で、発表者は初めの5分間、発表内容の要約を英語で話すことを義務づけている（このアイデアそのものは、残念ながら私自身のものではない）。このやり方を始めた当初は、（正直なところ）相当ひどいものであった。まず、5分間話せるだけの英文を準備できる学生はほとんどいない。主語と動詞の数の一致があやしい。少し複雑な文になると、構文がおかしくなる。考えてみれば、ほとんどの学生は、自分の言いたいことを英語で話す、という経験をもったことがないのである。そして、おそらくは日本語の要約を作ってからそれを英語に置き換えようとするためか、例えば「……という問題について論じたい」と言うとき、多くの学生が、“discuss about the problem of …” という言い方をする（“discuss”は他動詞なので“about”はつかず、“discuss the problem”）。

しかし最近では、かなり長く、そして複雑な話を、あまりひどい間違いもなく英語でできる学生が、だんだんと増えてきた。5分間きちんと話ができるようになれば、30分の研究発表まではあと一歩であろう。訓練をすれば学生は成長するものだと、少々感慨に耽ってしまう。この試みに関する私の経験から推測すれば、例えば、初めから発表全体を英語でやらせる、というやり方は、おそらく成功しなかったと思う。「5分間の要約」くらいのところが、たまたまちょうどよかったのであろう。だが、ある程度目に見えるだけの成果が出るまでには、（記憶があまり明確でないのだが）7～8年の時間が必要であった。「教育方法の改善」というような事柄は、おそらく多くの場合、直ちに成果が出るものではなく、気長に試行錯誤を続けてゆくべきものなのではないかと思う。最近の「大学改革」をめぐる議論が、何か「せっかち」な雰囲気を伴っており、そのことが、表面的な「改革」につながってゆくのではないかと、ということに、少し危惧を感じている。